

論文内容要旨

The effect of pentazocine on nausea and vomiting following catheter ablation

(カテーテルアブレーションにおけるペンタゾシンによる悪心・嘔吐への影響)

昭和大学薬学部臨床薬学講座医薬情報解析学部門 黒岩 亮平

【目的】

カテーテルアブレーションは、さまざまな不整脈の根治的治療として広く普及している。しかし、治療は侵襲的であり血管穿刺時や高周波通電中に患者は疼痛を感知するため、手技中には麻酔をかけることが多い。横浜市立みなと赤十字病院（以下、当院）では術前に鎮痛薬としてペンタゾシンを静脈投与するが、本剤の副作用である悪心・嘔吐が発現することがある。悪心・嘔吐は患者にとって不快であり、術後安静に支障をきたすため、その予防が重要である。これまでカテーテルアブレーション時のペンタゾシンによる術後悪心・嘔吐について検討した報告はない。本研究は、その発現状況を調査・検討した。

【方法】

2016年2月から7月までの期間に、カテーテルアブレーションを施行した患者を対象とし、術前鎮痛薬の投与量、術後悪心・嘔吐の有無などを後方視的に調査した。本研究は、当院の倫理委員会の承認を受けて調査した。麻酔管理は、術前鎮痛薬としてペンタゾシンを静脈投与され、投与量は2016年2月から4月までは15mg、5月から7月までは30mgで投与された。鎮静薬は、上室性頻拍や心房性期外収縮に対するアブレーションの際は、必要に応じてチオペンタールを静脈投与、心房細動や心房粗動、心室頻拍に対するアブレーションの際は、デクスメデトミジンの持続投与に加え適宜チオペンタールの静脈投与が行われた。

【結果】

256 例（男性 177 例，平均年齢 65.3±12.9 歳）について検討を行った。心房細動に対するアブレーションを行った患者は 185 例（72.3%）であった。その中でペンタゾシン 15mg 群は 134 例（52.3%），30mg 群は 122 例（47.7%）であった。

術後悪心の頻度は 15mg 群で 8 例（6.0%），30mg 群で 21 例（17.2%）と 30mg 群で高かった（ $p=0.005$ ）。術後嘔吐は 15mg 群で 6 例（4.5%），30mg 群で 14 例（11.5%）と 30mg 群で高かった（ $p=0.04$ ）。

単変量解析の結果，術後悪心に影響を与える因子を多変量解析した結果，女性（OR, 3.58 ; 95% CI, 1.54-8.29 ; $p=0.003$ ）とペンタゾシン 30mg 群（OR, 3.86 ; 95% CI, 1.57-9.48 ; $p=0.003$ ）が統計学的に有意な独立因子であった。

また，術後嘔吐に影響を与える因子を多変量解析した結果，女性（OR, 5.32 ; 95% CI, 1.88-15.1 ; $p=0.002$ ）とペンタゾシン 30mg 群（OR, 3.46 ; 95% CI, 1.19-10.0 ; $p=0.02$ ）が統計学的に有意な独立因子であった。

【考察】

カテーテルアブレーション時のペンタゾシンによる術後悪心・嘔吐の発現状況について調査し，その頻度はペンタゾシンの投与量との関連性が示唆された。

手技に応じて投与量を選択し，30mg 以上投与する女性患者に対しては制吐薬の投与を検討する必要がある。